説教余滴 2020 年 1 月 5 日、新春恒例

箱根の山登りは、青山学院大学チームが総合優勝しました。往路は青山、復路は東海大学の優勝です。テレビ中継は、テレビ放送開始間もなくから日本テレビが手がけてきました。
人気のない時も、営々と才知を傾け、見られる画面を作りだし、送り出してきました。今では、押しも押されぬ人気番組になりました。多くの人が待ち侘びているだろう、と感じます。これは個人的な感情です。違っていたら、ごめんなさい。お詫びします。

最近の中継で気付かされるのは、栄枯盛衰　世のならい、ということです。古くからの伝統校が、いまだに活躍しています。参加してきた、という意味の伝統校があり、実績を残してきた、という意味の伝統校があります。
今回、特に感じたのは、新設校の躍進です。東京国際大学は、初出場で総合５位。予選会はトップで通過しています。この学校は、埼玉県川越市にあり，前名は国際商科大学です。大宮から川越市内に入るとき、見かけたことがあります。校名変更は、教授内容の大規模変更に基づきます。商科系の単科大学だったものを、健康スポーツ学部などを加え、キャンパスも拡充、他校との合流などにより受け入れ能力を大きくしました。スポーツ選手を集め、成績を上げ、校名の周知を図り、受験志願者を増やす。一貫した経営戦略があります。この程度のことは、どの大学も考えていそうなものです。しかし、実施することがむずかしい。時期と方策が合致し、決断力を持った経営陣がいた、ということです。

同様の考えを持つ大学、と考えられるのは、亜細亜大、上武大、城西大、麗澤大、などです。麗澤大は、教授陣も充実しているようです。論文や評論にその名前が出てきます。新興大学と言って軽視することなく、その可能性に注目したいものです。ヨーロッパから見れば、200 年の大学などは新興に過ぎません。